雪たねニュース
北海道版
2009・③
№324

今月の主な目次

○放牧飼養の留意点
○雪印種苗の牧草品種の紹介と供給状況
○営業所からのお便り(1)
道央営業所の紹介
○平成20年産粗飼料の傾向

時の話題

激動の1年を振り返り目指すことは

ここ2年にわたる飼料原料の度重なる価格高騰はBRICs諸国での急激な経済発展・所得の向上に伴う畜産物の需要増加がありましたが、大きな背景にはすでにご承知の投機というグローバル化された実体経済でない金融工学の世界が蔓延され、サブプライム問題から派生しリーマンショックにより100年に1度と言われている恐慌を懸念されるまでに広がりをみせた。日本経済を牽引していた自動車・電気産業は世界同時不況により最大の経営危機に直面し、国内消費全体にもかげりを見せ始めました。

一方、酪農業界においては乳価の値上も決まり、また、酪農経営の主たる資材である配合飼料価格はつるべ落としのごとく今年1月より今まで経験のない大幅値下げとなり投機的要素から実需を反映した実体経済で動き始めました。しかし、このような現状での影響は、特に輸入依存度の高い府県の酪農経営にとって価格高騰はダブルパンチ（配合飼料・輸入乾牧草）で経営難から離農が急増し、生乳生産量は前年2.3%減の407.7千トンと低迷しましたが道内は2.9%増の390.5千トンになり自給飼料畑を確保している北海道との明暗を分けました。全国の生乳生産量は798.2千トンで前年比0.3%減少し20年ぶりに800万トンを割りました。この状況では北海道のシエア50%超えは間近で生乳生産基地としての期待は更に高まります。

あらためて自給飼料の重要性、経営に対する影響がいかに大きいか認識したところでございます。わが国の酪農畜産は省力化、機械化による大型経営に移行していますが、その経営を大きく左右する飼料の多くは輸入飼料に依存しているので、飼料穀物の相場によって極めて大きな打撃を被る弱点を持っている事はすでにご承知のことと存じます。この弱点を排除するには牧草・飼料作物を栽培し、その利用に工夫をこらし、良質多収安価な自給飼料を生産することが何よりも大切であり、また国が力をいれ当社も推進しているエコフイード生産拡大、耕畜連携の下での稲発酵粗飼料など、今まで食品残さとして捨てられていた副産物の飼料への利用、耕作放棄地の活用工夫であります。日本農業の真の危機は食料自給率の低下よりも農地利用の崩壊が先にあるのではと思います。土地基盤の高い北海道の強みを生かしましょう。

さて、今年は雪印種苗の前身であります保証責任北海道製酪販売組合連合（通称・酪連）にて初めて家畜ビートの採種を行い生産種子を酪農家に配布し普及を始め、70年目を迎えました。1939年（昭和14年）この採種事業がやがて北海道興農公社（略称・公社）での種苗事業となり、1937年（昭和12年）道庁に新設された飼料作物係りと連携した採種事業がやがて雪印種苗の採種事業につながっていったのです。

自給飼料作付けにおける重要性は種子の開発はもとより、世界的異常気象、GM問題、など安定供給に向け採種畑確保などコアな長年の技術を発揮し優良品種の確保に努め、本年も皆様のお役に立てるよう種子の供給に最善を尽くす所存でございます。

（専務取締役　酪農畜産本部長　岡村　一範）